

### + 3 5 【ばくげん】

おとなになって、というか、年寄りになって、ぼくはたまたまある優れた作家の本を読み、たいへん感銘（かんめい）を受けました。

それは中国の作家、莫言（日本読みで、ばくげん）で、現在は世界的な作家ですから、皆さんもごぞんじかもしれない。

一九五五年生まれですから、ぼくよりは十歳ばかり年下。

山東省高密県の農民の子として生まれ、小学校中退。代表作は映画化もされた『紅い高粱（こうりゃん）一族』の他、『透明な赤蕪』『酒国』『白檀（びやくだん）の刑』など。

短編では「竜巻」「洪水」「猟銃」「秘剣」などを興味深く読みました。

この作家の作品に、どうしてぼくが感銘を受け、興味深く感じたかということ、おそらく、いえきつと、それらの小説の主な舞台が、中国の貧しい農村であって、それがぼくの育った村を連想させたからです。

村は貧しくとも、活気があって、自然が美しく、ときとして恐ろしい。

登場人物も、ぼくがかつて見知った人びとによく似ていて、強く響いてくるものがありました。

荒々しく生々しく、健気（けなげ）で優しく、ときとして血なまぐさい。

ぼくは中国の文学では、杜甫（とほ）と魯迅（ろじん）が大好きで、若いころから強く影響も受けてきたのですが、この歳になって、莫言が加わりました。

さて以上は前置きで、これはおばけの話ですから、（この作家と同じ読みの）【ばくげん】のことを書きます。

「【ばくげん】たあ、ひろしまとながさきにおとされた、げんばくのことかろう」

村びとが騒いで、

「【ばくげん】に五人やられた」

というので、懐爺にきいてみたのです。

「そうですか。とうとう【ばくげん】がこの村にもやってきましたか」  
懐爺は深い溜息（ためいき）をつきました。

「やっぱり、げんばく、かのう」

ぼくも溜息をつきました。

「似て非なり、といたしますか。【ばくげん】はじつは、げんばくよりも怖いものです」

「そらあ、こまったのう。【ばくげん】にやられた、むらのひとたちは、たすかるかのう」

懐爺はまたひとつ深い溜息をついてから、

「村びとはもう助かっています。いやそういう言い方は正確ではない。肉体は助かっているけれども、精神は助かってはいません」

「【ばくげん】にやられると、まずは肉体に激しい衝撃（しょうげき）を受けます。だから身体のアチコチがひどくやられたとかんじますが、十日ほど経つと、痛くも痒くもなくなります。傷は膿（うみ）をもっているほどだというのに。ところが、十年ほど経って、傷はひどくなっても身体は死なないのに、心が死んでいることに、本人はともかく周りは気づきます」

よくわからない。

「ところが、しぬって、せいしんびょう、というもののかのう」

「精神病や認知症（にんちしょう）よりもひどい。外国に【ぞんび】というおばけがいて、まるでわたしみたいな顔と格好をしたやつが、ふつうの人間を襲って、【ぞんび】に噛み付かれた者は、十秒で【ぞんび】になってしまう、あれに近いですね。【ばくげん】はその十秒が十年というわけで、それがいっそう怖い。災難は忘れたころにやってくる、というわけですからね」

すこしわかってきた。

「【きゅうけつき】のこじきかい」

「乞食だって、あれよりは品がありますよね」

「かいじい、さっさとたいじしてくれや」

ぼくが当然のことをいうと、懐爺はこんどは頭をかかえました。

「【ばくげん】は、新しく発生した菌みたいなものですからねえ」

「きんかい、わしみみたいなものかい」

「金ちゃんの金ではなくて、病原菌（びょうげんきん）の菌ですよ」  
よかった。

「ならば、かくりかのう」

「それがその。小山の、むかし寺があった空地（あきち）に、村長が隔離小屋（かくりごや）を作りましたね。でも【ばくげん】は菌みたいなものですが、【ぞんび】とちがうのは、伝染病（でんせんびょう）ではないことです。十年後のために小屋を作るなんてことよりも、十年かけて特効薬を作るほうが大切です」

「いま、とっこうやくは、ないんかのう」

「町にはありますが、町で規約（きやく）を作って、村にはださないようにしています」

こういうことはよくあって、町は村を差別（さべつ）する雰囲気（ふんいき）があります。

「けちじゃのう」

「というよりも、特効薬を金儲けの道具にされるのを防ぐためなんですね」

「ならば、【ばくげん】にやられたもんを、すみやかに、まちまではこべばいいのじゃ」

「それはいい案ですが、【ばくげん】にやられた五人には、だれも近づきません。だれがどうやって運ぶかが問題ですね」

「わしがやったる」

「やっぱりねえ、金ちゃんなら、そういうとおもっていましたよ」

というわけで、ぼくは村長さんの庭から勝手に荷馬車（かばぐるま）をもちだし、そこに五人を乗せて町まで行きました。

荷馬車の馬はともだちだったので、馬を操るのはお手のものでした。

それで解決ということになったのですが、懐爺（わいおや）は浮かぬ顔をしています。

「【ばくげん】をやっつけても、【ばくげん】の元を断たないと、免疫（めんえき）のない者は、いずれまたやられます」

「もとたあ、なんじゃ。めんえきたあ、なんじゃ」

「どういいみましょうか。たとえば悪いですが、【ばくげん】はうんこの臭いみたいなものですから、元であるうんこが消滅しないかぎり、うん

この臭いはするわけです。そのうんこの臭いに慣れたなら、それは免疫があるってことです」

「うんこは、じかんがたってかわいたら、くさくないがのう。じかんがかいけつするから、めんえきはいらんのう」

「すいません。下手な例えでした。つまり、乾かないうんこですね」  
なるほど、それはたまらん。

「かわいてないうんこをかたづけるのは、だれでもいやなもんだからのう」

「それが、うんこを守るやつらがいて、片付けられないのです」

「うんこをまもるたあ、すいきょうなやつらじゃのう」

「酔狂ではなく、国家の方針ですかね。日本の話ではありませんが」

「うんこを、かっぱらったるか」

「うんこにさわっただけで、銃殺（じゅうさつ）されます」

「ならば、そのこっかを、たいじするしかないのう」

「それは戦争になります。いいことではありません。日本は永久に戦争はやらないことにしたのです」

それはけっこうなことだが。

「しかし、めいわくじゃのう」

「地球は、もちろん宇宙も、どの国のものでもない、ということをどの国も認識しないと、こういう新しいおぼけがこれからもでてくるでしょうね」

「わしは、これから、そういうこっかを、うんここっかとよんだるぞ」

「それはぴったりの名称ですね。わたしもそう呼びましょう」

懐爺の愁眉がひらいた気がしました。